## 発問例

### ●一八二ページ

問 **冒頭の二文には、この小説を読ませるうえでどのような効果があるか。**

答 時間、場所、人物の状況が提示され、以下の展開への興味が喚起される効果。「暮れ方」「雨やみ」の語が沈んだ雰囲気の印象を与え、「羅生門」「下人」の語が過去の時代を感じさせる。

補 京を舞台とする歴史小説、「日暮れ」から始まる物語、「雨やみ」を待つという受動的な姿勢などを押さえる。動ではなく静の傾きがある。

問 **「きりぎりすが一匹止まっている。」（3行目）には、情景描写としてどのような効果があるか。**

答 ぽつんと頼りなげなあり方により、①下人の孤独を印象づけ、②寂寥感を深めたり、③季節感や④色彩感などを表す効果。

補 場の寂しさや命のはかなさを一匹の虫によって象徴的に描写している点を把握させる。

問 **「この男のほかには誰もいない。」（5行目）における、係助詞「は」の働きは何か。**

答 取り立てて強調する働き。この男だけがいることを際立たせる。

補 「この男のほかに誰もいない。」（2行目）

問 **作者が「旧記」（7行目）に言及したのはなぜか。**

答 史資料を用いていることを明示して、歴史小説としての信頼度を高めるため。

補 語り手は物語の中の現在から離れ、現実の歴史上の現在の視点で、物語の外から、過去を確かめている。このことは語り手が「作者」自身であることを指示する。

問 **「仏像や仏具を打ち砕いて、……」（8行目）とあるが、このような事態は、端的にどのような状況を示しているか。**

答 生活の困窮が、人々の信仰心すら失わせるほどの、人心の荒廃をもたらしている状況。

補 単に生存困難な状況というではなく、人々の心がすさみきっている点を言う必要がある。

### ●一八三ページ

問 **「足踏みをしない」（1行目）とは、どのような様子か。**

答 足を踏み入れない、近づかない様子。

補 通常の用法との違いに注意する。

問 **「鴉」（3行目）の群れが飛ぶさまは、どのような印象をもたらしているか。**

答 血をイメージさせる夕焼けの赤と鴉の黒との対照による不吉さ（死）、気味悪さ。

補 視覚的な鮮やかさが一層不安をあおっている。

問 **「にきび」（15行目）の叙述を、この後の部分から三箇所抜き出しなさい。**

答 ①短いひげの中に、赤くうみを持ったにきびのある頬である。②もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなにきびを気にしながら③不意に右の手をにきびから離して

問 **「にきび」（15行目）は、どのようなことを物語っているか。**

答 下人が若く、それゆえの優柔不断さと危うい強さを持っていること。

補 「にきび」は下人を特徴づける焦点化された一点。以下、作品の要所で、下人の若さそれ自体が持つ悩み多い優柔不断さと、決断したら猪突猛進する強さ、感情の揺れなどが、この一点の印象に結びつけられる。

### ●一八四ページ

問 **◉「作者は…書いた。」（1行目）の一文には、どのような効果があるか。**

答 読者が本文から読み取ってきた平安末期の「下人」の状況が、「作者」が「旧記」などを参考にして執筆しつつあるフィクションであることに注意を向けさせる。

補 膨大な資料によって立ち上げられている小説世界がすべて書き手である「作者」によっ

て操作可能なフィクションであることを早い段階で明示することで、その創作現場を垣間見ながら下人の言動も追っていくというメタフィクション構造が成立している。

問 **「衰微の小さな余波にほかならない。」（5 行目）とは、どのようなことか。**

答 都の荒廃という時代状況の影響が下人に否応なく及んできたということ。

補 個人の力ではどうしようもない事態であることを捉える。

問 **「……というほうが、適当である。」（7 行目）というのは、なぜか。**

答 下人の状況を正確に伝えているから。

補 単なる雨宿りでないことが要点。

問 **「この平安朝の下人の Sentimentalisme」（8 行目）という表現には、どのような効果があるか。**

答 下人を、作品の舞台とは異質の、近代的な人間心理を備えた人物として印象づける効果。

補 フランス語の原語表記が読者に、時代と状況のミスマッチを感じさせる異化作用として働いている。知的スノビズム（俗物主義）と反発する向きもあろう。

問 **「どうにもならないこと」（10 行目）とは、どのようなことを表しているか。**

答 「明日の暮らし」のめどが全く立たないこと。

補 生きるための方途がなく、追い詰められている状況の確認。

問 **「雨は……」（13 行目）「夕闇は……」（13 行目）という描写は単なる情景描写にとどまらない効果を持つが、どのような効果か。**

答 下人の重苦しい心の心象風景となる効果。

補 追い詰められた心の不安を伝える描写である。

問 **◉「手段を選んでいる暇はない。」（16 行目）とは、「下人」のどのような状況を述べているか。**

答 生き延びるためには、善悪の判断を超えた現実的行動を選択せざるをえないところまで追い込まれている状況。

補 「手段を選ばない」とは、目的のためにはどんな手段でも実行すること。具体的には「盗人」にでも何にでもなること。瀬戸際にまで追い詰められた心理にあることが分かる。

**●一八五ページ**

問 **◉「この局所」（5 行目）とは、どのようなことを指しているか。**

答 手段を選ばないとすれば、盗人になるよりほかにしかたがないということ。

補 考えの筋をたどって、「手段を選んでいる暇はない」から「選ばないとすれば」という条件の部分までは、考えが絞られてきたので、「局所」の語を用いたのである。限られているのであって、全体を見渡しての判断とは受け取りづらい表現である。受けている部分はダッシュまでを含むので注意したい。

問 **「あげく」（4 行目）「結局」（6 行目）の語源を答えなさい。**

答 「あげく」は、連歌・連句（短歌の五七五の長句〔上の句〕と七七の短句〔下の句〕を数人がつないで詠み合う形式の文芸）の最終句。「揚げ句」とも言い、初句の「発句」と対応する呼び方。「結局」は囲碁を打ち終えること。

補 両者ともゲームの終わりを意味する用語から転じて、最後、終末の意を示す。

問 **「すれば」（5 行目）とあるが、「　」つきで述べているのはなぜか。**

答 現段階では仮定の段階を出ないということを強調するため。

補 論理の必然として逢着した「局所」ではあるが、心にはその後を肯定する勇気が生まれない事態の確認。

問 **『すれば』の片をつける」（7 行目）とは、どのようにすることか。**

答 「盗人になる」ことを肯定すること。

問 **「勇気が出ずにいた」（10 行目）のは、どういう気持ちの表れか。**

答 盗人になることをためらう気持ち。

補 なぜ逡巡するかについてまで含めた解答もあり得るが、逡巡の理由を限定することは困難である。ただ、さまざまな理由をあげることは読みを広げ深めることになろう。

問 **「大きなくさめ」（11 行目）は下人のどのような状況を表しているか。**

答 吹きさらしの石段に座り続けて、雨の夜の寒さが身に迫って来た状況。

補 晩秋の雨の夜、座って思案に暮れていた間の時間の経過も読み取れる。

問 **「大儀そうに立ち上がった」（11 行目）のはなぜか。**

答 一晩楽に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったから。

問 **「きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。」（14 行目）という記述には、どのような効果があるか。**

答 夜の深まりという時間的経過と一層の寂しさを感じさせる効果。

補 時間の経過を示し、寂寥感、孤独感をさらに増している。

**●一八六ページ**

問 **「どうせ死人ばかりである。」（4 行目）というのは、下人のどのような気持ちの表れか。**

答 「人目にかかる」よりは、死人と一緒にいるほうがましだ、面倒がなく気楽だ、という気持ち。

補 「盗人になる」ことを考えていたことの負い目、心身の疲労で早く休みたい気持ちが、人に煩わされたくない思いを生んでいる。

問 **「聖柄の太刀」（4 行目）は、下人にどのような印象を加えているか。**

答 力強く、精悍な印象。

補 ここに至って初めて、太刀を帯びた若い男というイメージが浮かび上がる。

## 語句の研究

**●一八二ページ**

**1 ある日の暮れ方のことである。**　「ある日」という書き出しは、物語的、説話的発語であるが、近代小説としての冒頭の重みは、「暮れ方」という語の方にある。「暮れ方」は昼と夜の〈境界〉、光から闇への移行の時、日常世界の変容に出会う〈逢魔が時〉を指示して、以後の展開を促す。

**1 一人の下人**　ここで「一人」は「或る」の意だが、後に（P 一八二・3、6）繰り返しで語られる「この男のほかに（は）誰もいない。」によって、「一人」が「独り」と読み替えられる意味を潜在させている。「下人」は、主に仕えて下働きをする身分の低い男。

**1 羅生門**　本来「羅城門」と書くが、近世以降「羅生門」と慣用化されていった。「羅城」は城（都）を羅（めぐ）りおさえるという意味。「羅生」は「生を羅（からめと）る＝生の実相を究める」を含意させるために採用された表記であろう。朱雀大路の南端に位置し、平安京の玄関口となる轍ぶき、二重閣、朱塗りの総門である。洛中洛外を区切る〈境界〉であり、作品では、地上と楼上を舞台として、生と死の交錯、日常世界と非日常世界の転換を促す〈門〉の役割を持つ。

**キー・ポイント　「日暮れ」と「羅生門」**　物語は「日暮れ」に始まり、「黒洞々たる夜」に終わる。また「羅生門」の門下から始まり、楼上へ舞台を移した後、門下へ戻る場面で終わる。時間的、空間的な〈境界〉が光と闇、静と動、生と死、善と悪、日常性と非日常性などの対比を際立たせて、変容

の舞台となる。

**3 きりぎりす**　原文は「蟋蟀」に「きりぎりす」とルビがある。人気のない雰囲気を強め、男の孤独感にふさわしい。古典のキリギリスは現在のコオロギだが、コオロギなら「夕冷え」とともに晩秋の寂しさにふさわしく、キリギリスなら「丹塗り」の柱との色彩の対比でただ一匹の印象が強まる。荒廃した無機質な円柱と有機物のきりぎりすとの対比から寂寥感を強調している。

**3 朱雀大路**　平安京の中央大路であり、本来人通りがにぎやかな街路。

**4 市女笠**　平安時代以降、上流女子の外出用のかぶり物。ここは、それをかぶった女を指す換喩法の表現と対比して「は」のあるなしの強調の度合いの差を考える。反復したうえで念押しをする対応の妙を指摘する。

**4 揉烏帽子**　貴族の男子の平常服の折のかぶり物。「市女笠」と同じく換喩法でそれをかぶった男を指す。

**4 それが、この男のほかには誰もいない。**　「それが」は予想に反する意を示す接続詞。「この男のほかに」は三回反復される。「この男のほかに誰もいない」（P一八二・2）「この男のほかにも……ものである。」（P一八二・3）とあり、ここで念押しする。人気のない羅生門に、この男のいることの異常を指摘し、物語の非日常性を強く指示する表現。

**6 この二、三年**　平安末期を指す。

**7 旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて**　真実性を強めるための表現。鴫長明の「方丈記」第五段の養和年間（一一八一年）の大飢饉を叙した一節がそれに当たる。仏像仏具の破壊は、信仰心すら失せた末法の世の荒廃を示し、規範の喪失、価値の転換という面から作品世界の展開を支える意味を持つ。

**12 日の目が見えなくなると**　ここでは暗くなると、の意。「日の目」は、日の光、太陽光線。普通〈日の目を見る〉は、世に埋もれていた物事が初めて世間に知られる意。

**●一八三ページ**

**1 足踏み**　ここは、足を運ぶ、足を踏み入れる意。

**7 それがごまをまいたように、はっきり見えた。**　「ごまをまいたように」と眺める視線は、空を覆う「夕焼け」に包まれた羅生門のシルエットを距離を置いて浮かび上がらせる位置からのものであろう。死人の肉をついばみに来て、流れ出る血の色のイメージを喚起させる赤い「夕焼け」と死者の使いを暗示させる黒い「鴉」の群れは羅生門のたたずまいに不気味な感じを加えている。

**10 刻限が遅いせいか、一羽も見えない。**　刻限の他に雨のせいもあろう。人はおろか鴉さえ不在の「この雨の夜に」（P一八九・7）、男が一人いる特異さが際立つ。

**13 七段ある石段**　羅生門の石段は実は五段である。後の小説「偸盗」（大六）では正しく五段となっている。七段が羅生門の規模にふさわしいと考えたのかもしれない。

**14 紺の襖の尻を据えて**　「襖」は宮中武官の礼服の腋わきのあいた袍ほう、また公家の常用服の「狩かり襖あお」（裏をつけた狩衣）を指すこともあるが、帯刀と共に庶民にはふさわしくない。当時、一般の普段着であった袷あわせ、裏をつけた上着のことであろう「尻」は着物の場合、後部に垂れた裾をいう。「襖の尻」を石段に敷くように座ると取れる。「尻」を身体部位ととれば、「襖」を着ていて腰を下ろす様子である。

**15 大きなにきびを気にしながら**　下人がま

だ若く、その心の動きや行動に若さゆえの振れ幅があることを予想させる。

**キー・ポイント　にきび**　「にきび」の表現は、他に「赤くうみを持ったにきびのある頬である。」（P一八六・9）、「もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなにきびを気にしながら」（P一九二・6）、「不意に右の手をにきびから離して」（P一九二・15）と、四箇所ある。他の身体の特徴の描写を省き、主人公をこの一点で印象づける。若い男の生臭さ、精神や行動の危うさ、感情の振れ幅などを感じさせる。

「王朝時代の人間にも、にきびのないこともあるまいと云う、謙遜すれば当推量によったのであるが、その後『左経記』に二君とあり、（略）今日のにきびであることを知った。」と作者は語っている（「澄江堂雑記一」）。

**16 ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。**　再び冒頭の「雨やみを待っていた」下人の現在に言及することで小説の語りを一区切りさせ、次の展開を呼び出す描写である。

**●一八四ページ**

**13 作者はさっき**　「語り手」が「作者」であると表明することで、「作者」の視点から物語られることを読者にはっきり示す。語り手の視点から作品世界を一元的に把持し、状況を説明したり、登場人物を外から眺めたり、また、その内面に踏み込んで心理を分析したり、意見や評価まで表明するのは、すぐれて近代小説的な手法である。

**キー・ポイント　「語り手」＝「作者」**　小説の「語り手」が作者とは限らないことを先に確認し（猫が語る例、作者とは違う「わたし」が語る例など）、羅生門の「語り手」の特徴を考える必要がある。

羅生門では「作者」が語り手であることを表明している。「さっき、……と書いた」（P一八四・1）、「前にも書いたように」（P一八四・3）と語り、「旧記によると」（P一八二・7）、「旧記の記者の語を借りれば」（P一八八・9）と旧記に言及する。この語り手は作品の中の現在を語りながら、思い出したように作品の外に出て〈書いている自分〉を読者にアピールする。例えば、「この男のほかに誰もいない」と語る際、語り手は〈作中の現在〉の時間に沿っている。ところが「旧記によると」と語ったとき、この語り手は、この作品を書きつつある〈現在〉から、旧記に言及している自分の姿をあらわにする。作品の外の、現実の歴史の一時点から作品に介入して語ることで、自分の語り（＝記述）の真実性を現実に残された文献で保証しようとする知的なたくらみが見える。「作者はさっき」云々と語る場合はもっと露骨である。読者は作者の視点に同化させられて下人を中心にした物語を読まされるわけである。意地悪く見れば、正確な語り（記述）を心がけるそぶりの裏に、読者に書く自分を印象づけようとする気負いを読み取ることもできる。Sentimentalisme というフランス語の使用にもこれに通底する傾きがある。

**3 その主人からは、四、五日前に暇を出された。**　主典拠の「今昔物語集」巻二十九第十八話「羅城門登上層見死人盗人語」では「摂津ノ国辺ヨリ盗セムガ為ニ京ニ上ケル男」となっていて、初めから盗人として上京した設定である。小説では、「盗人になること」を選ぶことが主要な動機（モチーフ）であり、「四、五日前に暇を出された」とすることで、下人の追い込まれた状況がはっきりする。

**4 この衰微の小さな余波**　「衰微」は、衰え弱ること。京都全体の社会状況を指す。「余波」

は物事の及ぼす影響。不況下の失職という個人の力では抗し難い成り行きが、社会の片隅に生きる下人にも及んだ事情を言う。解雇の事情は語られていないが、下人に特に不始末があったのではないと考えてよいであろう。主典拠の「今昔物語集」にはない設定で、主人公が京の町から来たと取りうる記述。（これには異論もある。）

**8 そのうえ、今日の空模様も……下人の Sentimentalisme に影響した。**

「Sentimentalisme」（フランス語）は、感傷癖、物事に感じやすく感情が刺激されやすい傾向。「そのうえ」とあるのは、失職に加えて、雨も下人を羅生門にとどめて、下人の Sentimentalisme を深めるからである。

**キー・ポイント**　Sentimentalisme　情緒的反応に走りがちな下人という設定は、後に老婆の行為を「許すべからざる悪」（P 一八九・8）と決めつける行動を見るうえでも重要。「平安朝の下人」にフランス語の表記をそのまま用いたのは、この作品が歴史小説の体裁の下に、近代的な人間心理を中心に描く小説であることを物語る。知的ハイカラ趣味とも見えるが、翻訳不可能なニュアンスを生かそうとしたのであろう。

**9 申の刻下がり**　今の午後四時過ぎ。「下がり」は、その刻限を少し過ぎたことを言う。「申」は動物の比喩「猿のような老婆」（P 一八八・5）を導き出す伏線。さらに、十二支の順で言えば次の「酉」（トリ）へとつながり、「鶏の脚のような」（P 一九〇・3）を呼び込む効果があると思われる。

**10 どうにもならないこと**　「衰微の小さな余波」の結果、「明日の暮らし」も成り立たないまでに追い詰められた状態。

**10 とりとめもない考え**　終わりがなく、まとまりのない考え。後の「何度も同じ道を低回した」（P 一八五・4）考え。

**11 聞くともなく聞いていたのである。**　「とりとめもない考え」に心を奪われた下人に、雨の「ざあっという音」（P 一八四・13）がそれと意識されないまま不安を加える効果を出している。

**13 雨は、羅生門を包んで、……重たく薄暗い雲を支えている。**　羅生門を包む「雨」と「夕闇」は下人を追い詰める状況の、「重たく薄暗い雲」は下人の暗澹たる心の、暗喩となる。「雨は……」「夕闇は……」「門の屋根が……」の擬人法が羅生門をめぐる空間を動的にし下人に迫る印象を利かしている。陰鬱な羅生門の情景が、主人公の重苦しい心象風景に重ってくる。

**16 手段を選んでいる暇はない。**　明日の暮らしを成り立たせる手段を選り好みする余地などない。「盗人になる」以外の手段を思案する暇はない。

**16 選んでいれば、……飢え死にをするばかりである。**　生か死かの瀬戸際にあっては、生存することが第一義であり、手段の選択について善悪の判断に迷うのは二次的な問題にすぎないという冷厳な事実の確認。ただし、これは下人の「途方に暮れた」心理の動きは語っても、本当に下人の生存が〈限界状況〉まで追い詰められていたことまでは意味しない。迷っていること自体が、せっぱ詰まっていない証拠である。下人は、まだ、結論をためらったまま「ともかくも、夜を明かそう」（P 一八六・2）と明日への先延ばしができる程度の状況にある。

**●一八五ページ**

**3 選ばないとすれば――**　下人の選択は、実際のところ、手段を〈選ぶ〉〈選ばない〉の二者択一の問題ではない。生き延びることを考える限り、手段を〈選ばない〉という

帰結は論理的には最初から自明である。

「――」による中止は、盗人になることの躊躇を表しているが、ここに来てやっと盗人になるという選択肢につきあたった。だが、「電着した」の後の「しかし」で、「この局所」はまたひっくり返される。

**4 何度も同じ道を低回したあげくに、やっとこの局所へ逢着した。**　「低回」は、本来首を垂れて思案しながら行きつ戻りつしている様子。下人は座っているのだから、ここでは、考えの筋道の上で立ち迷うことだが、生きる道に行き悩んで思案投げ首で歩き回る下人の姿がおのずから重なる効果的な表現。「局所」は、全体の中の限られた場所のこと。「逢着」は、出会う、到着する意。「この局所」は、「選ばないとすれば――」を指す。思考の目下の帰着点である。

**キー・ポイント　やっと**　考える過程で、論理上それ以外にはないという絞られた場所（「選ばないとすれば」という条件の部分、これがすなわち、「この局所」の指すところである）までは認めざるをえないということを、〈ようやく〉認めたのである。したがって、「やっと」は、答えが見つからないまま何度も考えた末に、やっと答えを見つけたという、純論理的な推論の上のことではない。下人にとって、「飢え死にを逃れる」ためにはどんな非常手段をも取る以外にないこと、つまり、生きるためには「盗人になる」ほかに生きる術がない事実は論理を持ち出すまでもなく、初めから分かっているのである。だが、心理的には、それを直視してはっきりと認めることをためらう気持ちが「低回」を生んでいる。

**5 この「すれば」は、……結局「すれば」であった。**　「選ばないとすれば」の「すれば」を取り立てて「　」で示したもの。「すれば」という条件から導かれる論理的に明白な次の結論を避けようとする下人の不決断の指摘である。

**キー・ポイント　「すれば」**　仮定条件の形をとってはいるが、思考の理路の上では、「仮に～としたならば」という仮定の意を示すものではない。思考の理路（論理の展開）の局所に当たる「手段を選ばない」という一応の帰結は、下人にとって、必然的、確定的な条件である。生存の論理として「すれば」は「手段を選ばない以上」という確定条件であり、その後に続く最終的な帰結（「盗人になる」）も明白である。だが、論理的には確定的でも、心情的にはそれを認めることへのためらいがあるために、「すれば」を押し破れないのである。要するに、下人は理屈の中で立ち迷うだけであり、いやでも結論を出さざるをえないせっぱ詰まった状況にあるとも、追い込まれた心理状態にあるとも感じられない。限界状況下の生存の危機という切迫した立場を読み取ることは困難である。むしろ、主を離れた男として、今後の生き方を旧来の主に仕える道にではなく、己を立てる道に求める志向性を潜めながら、具体的にはただ「盗人」しか思いえない未熟な狭さゆえに、「盗人」の道の選択に必然の契機を見いだせないでいる甘さが、ためらいを生んでいるとみなすほうが、この下人にはふさわしい。

**7 この「すれば」の片をつける**　「片をつける」は物事を決着させる、処理する意。「すれば」で立ち止まらず、最終的な論理的帰結に至り、「盗人になること」を肯定すること。

**9 積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいた**　生存を第一義として「盗人になる」ことを選択する勇気、すなわち、「盗人になる」ことへのためらいを踏み破る果断さが、欠

けていること。ここでは、踏むべき二段階の過程が一緒くたにされている。まず、論理的な帰結を論理上肯定するだけなら、ためらう必要はない。次に、論理の結論に従って実際にやるかどうかの決断の問題が起こる。ここで初めて、ためらいが起こる。「勇気」の語はこの決断の段階にかかわる。下人は、自分の明日の生き方に実際にかかわる問題のために、論理的な結論を心理的に肯定できないのである。そこで「積極的に」という語が特に加えられているのである。副助詞「だけ」はここでは限度の上限を示す。「十分に～に至るまで（の）」の意。

**キー・ポイント　勇気の欠如**　結論がほかにはないのに、ためらいがあるのは、一般的道徳感情による「悪」を忌避する心理、決断してもその先が分からない不安の心理などがあるからであろう。もともとそんな気力も体力もないと臆する傾向があったためかもしれないし、利害得失を計算する心持ちもあったかもしれない。第二段で「悪」への憎悪が中心的に語られることから、語り手は、ここで「悪」を選び取る問題に読み手を誘導していると考えられる。この観点に立てば、生き延びる手段の選択と自己を支配する道徳感情との狭間にあって、思案に暮れている状態が勇気の欠如である。だが、「盗人になる」ことは「悪」だから、下人は「悪」への決断に迷っていたのだと直ちに言いかえることはできない。ただ、「盗人になる」決断に迷っていたと言えるだけだ。善悪の問題を立てるとしても、下人の道徳感情は、世間的、一般的な善悪の価値基準を超えるものではない。まして極限状況下の実存にかかわる善と悪の問題と考えるには、下人の勇気のレベルは緊張感を欠き、平板な躊躇の域を出ていない。

**11 大きなくさめをして、それから、大儀そうに立ち上がった。**　「くさめ」はくしゃみ。「大儀」は骨が折れる、面倒でおっくうなさま。雨の中、夜の寒さが迫る中で、肉体的、精神的な疲労が下人の動作を緩慢にしている。寒さが身にしみて立ち上がったのだが、同時に考えるのに疲れてきたと言える。

**12 火桶**　この語で秋の深まりを示す。

**14 きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。**　時間の経過と一層の寂しさを示す。

## ●一八六ページ

**4 どうせ死人ばかりである。**　「人目にかかるおそれのない」とあるように、肉体的、精神的な疲労から、人に煩わされずに休めればどこでもよいという投げやりな気持ちを示す。羅生門の現状を知っていたことは、下人が都の内から来たのか、それとも都の外から来たのかを考える際のヒントになる。

**4 聖柄の太刀**　下人が「太刀」を帯びていることが初めて明らかになる。以前の仕事に関係するのだろうか。武に心得のある若者なのか、若者にありがちな虚勢や見栄なのか、考える余地がある。太刀が「盗人になる」選択を自然に促していたという面もあろう。第二段以降の下人に必須のアイテム。

**5 鞘走らないように**　刀身が鞘から自然と抜け出てしまわないように。

**5 そのはしごのいちばん下の段へ踏みかけた。**　足に焦点を当てて、いったん場面を切る働き。テレビドラマでなじみの暗転の手法。

**注意する語句**

（＊で用例を示した）

**一とおり**…物事の状態が普通であるさま。尋常。
＊その辛さは一とおりではなかった。

**足踏み**…ある場所や家などに立ち入ること。
＊この場所には二度と足踏みをしない。

**洗いざらし**…衣服の、洗いすぎて色が褪せた様子。また、その衣服。
＊洗いざらしのシャツを着る。

**途方に暮れる**…どうしたらよいのか分からず、困り果てる。
＊財布をなくして途方に暮れた。

**暇はない**…余地やゆとりが全くない。
＊仕事がたまっているため、眠る暇はない。

**あげく**…（あることをした）末。いろいろやってみた結果。
＊どの店に入ろうか迷ったあげく、最初に見つけた店に決めた。

**手段を選ぶ**…あることを実現させるための方法を迷う。
＊手段を選ばない犯行。

**片をつける**…仕事やもめごとなどの始末をつける。決着をつける。
＊借金まみれの生活に片をつけて新しい商売を始める。